

国語科学習指導案

日 時 平成25年5月24日(金) 第2校時

対 象 1年3組(男子20名 女子20名 計40名)

指導者 教 諭 林 涼 子

1 単元名 思いを言葉に

2 単元設定の理由

(1) 教育的意義

現代は、情報伝達手段の多様化により、様々な情報を容易に受信したり発信したりできるようになってきた。また、メール等によって、仲間同士の気軽な情報伝達が頻繁に行われるようになってきた。それに伴って、用件を単語や短文で伝えたり記号や絵を使って象徴的に表現したりすることが当たり前になりつつある。その結果、相手や場面に応じたコミュニケーションを適切に行うことができない人が増えつつあるのが現状である。

このような現状は中学生も例外ではなく、よく考えないまま言葉を発したり、携帯電話等で真意の伝わりにくい文を交換したりすることによって、トラブルになるケースも多い。

そこで、自分が伝えたいことを相手に的確に伝えるために、構成等を工夫したり根拠を明確にしたりして書くことができるようにするとともに、書くことによって自分の考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てたいと考え、本単元を設定した。

ここでは、自分が伝えたいことを体験文としてまとめる活動を行わせる。生徒は、体験文を書くことによって、日常生活を振り返り、強く心に残っていることやなぜ心に残っているのかを考え、自分の考えや思いとしてまとめることができる。また、その考えや思いを友達に的確に伝えるための工夫をすることによって、誤解を招かないように、よりの確に伝わるように注意しながら相手に伝えることの大切さを実感することができる。

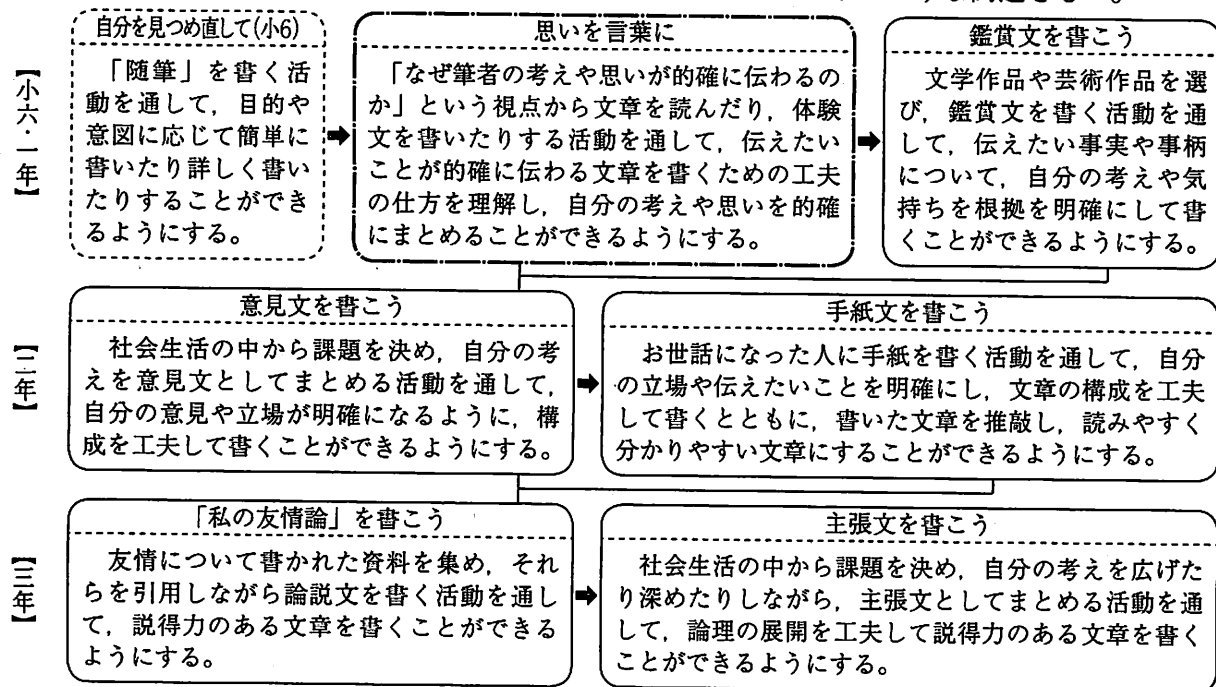
具体的には、まず、「的確に伝わる文章を書くコツをつかもう」の学習で、複数の体験文を比較しながら読ませる。そして、なぜ的確に伝わるのかを探る活動を通して、文章の構成や語句の用い方、表現の仕方等を理解させる。次に、「体験文を書こう」の学習で、自分が体験したことの中から話題を取り上げ、その体験を通して考えたことや思ったことが友達に的確に伝わるように工夫した文章を書かせる。さらに、推敲の過程で自他の文章を自己評価したり相互評価したりすることによって、更に読みやすく分かりやすい文章になるように工夫させる。

本学習を通して生徒は、日常生活の中から課題を見付け、材料を集めるとともに、自分の考えをまとめる力を高めることができる。また、自分の考えや思いを的確に表現するために、根拠を明確にして書いたり文章の構成や語句の用い方、表現の仕方を工夫したりする力を高めることができる。さらに、自己評価や相互評価を通して、自分の表現が適切かどうかを振り返り、よりの確な表現になるように修正しようとする態度を高めることができる。

これらの力や態度を高めることによって、生徒の「ことばの力」を高めるとともに、本校国語科が目指している創造的に思考する力を高め、自発的な態度を育むことができるものとする。

(2) 連関的意義

本単元は、ねらいと教材・学習活動の構成の系統において以下のような関連をもつ。



3 単元の目標及び評価規準

【単元の目標】

- (1) 学習に進んで取り組み、自分の考えや思いを的確に表現するための工夫の仕方を自ら探ろうとするとともに、よりの確に表現するために構成等を工夫しようとしてすることができる。
- (2) 複数のモデル文を比較して読む活動を通して、的確に表現するための文章の構成の仕方や語句の使い方、表現の仕方を理解することができる。
- (3) 自分の考えや思いが相手に的確に伝わるように、根拠を明確にしたり、文章の構成や語句の使い方、表現の仕方を工夫したりして文章を書くとともに、自己評価や相互評価をしながら修正することができる。

具体的には次に掲げる内容を重点的に指導する。

評価の観点	評価規準	学習指導要領との関連
国語への関心・意欲・態度	① 複数のモデル文を進んで比較し、筆者の考えや思いが的確に伝わる理由を、文章の構成や語句の使い方、表現の仕方がどのように工夫されているかという視点から的確に捉えようとしている。 ② 自分の考えや思いを明確にし、相手に的確に伝わるように進んで工夫して書いたり、モデル文や友達の表現を自分の表現に役立てたりしようとしている。	
書く能力	③ 複数のモデル文を比較して読むことによって、自分の考えや思いを的確に伝えるためには、文章の構成や語句の使い方、表現の仕方を工夫するとよいことを捉えている。 ④ 日常生活で体験したことの中から話題を見つけ、材料を集めるとともに、体験を通して思ったことや考えたことをまとめている。 ⑤ 相手に的確に伝わるように文章の構成や語句の使い方、表現の仕方を工夫しながら、自分の考えや思いを体験文にまとめている。 ⑥ モデル文や友達の文章と自分の文章とを比較して分かったことを基に、より読みやすく分かりやすい表現になるように修正している。	ア 課題設定や取材 イ 構成 ウ 記述 エ 推敲

4 単元の指導計画

(1) 単元設定の視点

ア 生徒の実態から

中学1年生の生徒は、小学校までの学習において、「考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理する」「自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考える」等の力を身に付けている。

また、本学級では、「書くこと」の学習において、次のような実態がみられる。

- ・ 自分の考えや思いを具体例を挙げながら、分かりやすく書こうとする生徒が多い。一方で、書きたいことを羅列してしまうことが多く、構成を工夫して分かりやすく書こうとする態度が不十分である。
- ・ 主述のねじれや誤字脱字等に注意しながら読みやすく分かりやすい文章を書こうとする生徒が多い。一方で、根拠を明確にしたり、表現の仕方を工夫したりするまでに至っていない生徒も多い。
- ・ 体験文や意見文を書く際に何を書いたらよいか分からず、テーマを決めたり材料を収集したりするのに時間がかかる生徒がみられる。

このような実態から本単元では、何を書けばよいか分からないという生徒のために、いろいろなテーマの文章をモデル文として読ませ、参考にさせることにした。また、伝えたいことを的確に伝えるための工夫の仕方をモデル文を比較する活動を通して自ら発見させ、体験文を書く際に、文章の構成や語句の使い方、表現の仕方等を自ら工夫することができるようにしていきたい。

イ 本校の研究内容との関連から

① 「比較」における教材の工夫

本単元では、体験文を書く前に「的確に伝わる文章を書くコツをつかもう」という小単元を設定し、文章の書き方を生徒自身に学びとらせることにした。何をどう書けばよいか分からない、的確に伝えるための具体的な工夫の仕方が分からないという生徒に、まず、的確に伝わる文章とはどのような文章なのかを理解させる必要があると考えてのことである。また、文章の構成や語句の使い方、表現の仕方は、生徒が実際にそのよさや効果を実感しなければ、自分の表現に活用することは難しいと考えてのことである。

生徒自身が的確に伝わる文章を書くコツを自らつかんだり、工夫のよさを実感したりするためには、その目的に応じた複数の文章を比較させると効果的である。一つの文章を分析するよりも複数の文章を比較した方が、それぞれの、またはどちらか一方の特徴やよさが浮き彫りになり、よりよい工夫の仕方に気付かせることができるからである。

そのために、以下の条件を備えた文章をモデル文として用いることにした。

- 伝えたいことが明確である。
- 自分の気持ちや考え、その根拠が明確である。
- 文章の構成やそれぞれの段落の役割が明確である。
- 考えや思いを表現するのに適した語句や表現が用いられている。

さらに、モデル文は、鹿児島県作文教育研究会編の生徒作文集「かごしま」に掲載されている作文の中から選択した。生徒は、モデル文が同年代の生徒の作品であることから親しみを感じ、「自分にもできるはずだ、もっと工夫してみよう。」という意欲を高めるものと考えた。

② 「比較」における思考の広がりや深まりを重視した指導の工夫

生徒が的確に伝わる文章を書くコツを発見していく過程で、思考を広げたり深めたりすることができるようにするために、まず、導入の段階で、構成や表現の仕方が明確に異なる二つのモデル文を教材として用い、比較させることにした。

その際、「自分だったらどちらの文章を書きたいか」と問うことによって、二つの文章の違いを分析させ、吟味させたり価値付けさせたりすることを通して、自分が書きたいと思うのは、どのようなよさがあるからなのかを理解させていきたい。

次に、効果的に構成されているモデル文を用い、段落の並び替えをさせることにした。生徒は、書かれている内容や用いられている語句などを根拠として効果的な段落のつながりを自ら見いだしていき、その過程で、各段落の役割を実感するものとする。また、最初の文章と並び替えた後の文章を比較させることにより、生徒は、文章の構成を工夫することによって、伝えたいことがよりの確に伝わるようになることを実感するものとする。

最後に、語句や表現技法が効果的に用いられている文章と、その文章の推敲前の文章（同じ内容ではあるがそれほど工夫がなされていない状態の文章）をモデル文として用い、比較させることによって語句の用い方や表現の仕方に気付かせることにした。

このように、比較する活動を通して生徒自身に工夫の仕方を発見させることによって、生徒は、自分の考えを広げたり深めたりするものとする。

(2) 単元の指導計画（全10時間）

単元	学習活動	時間	指導に当たっての手立て	評価
的 確 に 伝 わ る 文 章 を 書 く こ つ を つ か も う	導 入	1	- 二つの作文を比較し、自分だったらどちらの文章を書きたいか考えさせることによって、より優れた文章を読んだり書いたりしようとする意欲を高める。 - 自分の考えや思いを的確に伝える体験文を書く学習であることを理解させ、学習への見通しをもたせる。	評 価 基 準 ①③ 観 察 ノ ー ト ワ ー ク シ ー ト
	展 開	2 本 時 (3/10)	モデル文「母のおくり物」の特徴やよさを分析した上でよりよい構成について考えさせ、段落の役割や効果的な文章構成について理解させる。	
	開 発	1	モデル文「確かに僕は飛んだのだ」における推敲前と推敲後の文章を比較させることによって、より効果的な語句の用い方や表現の仕方について理解させる。	
	終 末	0.5	- 構成の工夫、語句の用い方、表現の仕方についてまとめさせる。 - 教材として用いた生徒作品を参考に、どのようなテーマで書くか考えさせる。	
思 い を 言 葉 に	導 入	0.5	題材や材料を見つけるのが苦手な生徒のために、行事や日常生活に関する写真や日記を提示し、興味や関心を高めさせる。	評 価 規 準 ②④⑤⑥ 観 察 ノ ー ト 下 書 き 用 紙 体 験 文
	展 開	4	- 推敲の欄を設けた下書き用紙に書かせることによって、自分の表現の変容を視覚的に捉えることができるようにする。 「的確に伝わる文章を書くこつをつかもう」の学習を基に推敲の観点を捉えさせる。 - 自己評価や相互評価をさせ、よくなった点や更に工夫した方がよい点について確認させる。	
	開 発	1	作品を相互に読み合い、よい点について話し合う。	
	終 末	1	工夫の成果や自他の成長を実感させるために、的確に伝わる文章か、それはなぜなのかについて話し合わせる。	

5 本時の指導（3/10）

(1) 指導目標

モデル文を基に、伝えたいことをよりの確に伝えるための文章の構成を考えさせる活動を通して、段落の役割や効果的な文章構成について理解を深めることができるようにする。

具体的には、主として評価規準③に即して、次の「書くこと」に関する能力の育成を目指す。

十分達成されている	モデル文を比較して読むことによって、自分の考えや思いを相手に的確に伝えるためには、それぞれの段落の役割を理解し、その役割を生かした文章の展開になるように構成を工夫するとよいことを捉えている。
おおむね達成されている	モデル文を比較して読むことによって、自分の考えや思いを的確に伝えるためには、それぞれの段落の役割を理解した上で文章の構成を工夫するとよいことを捉えている。
達成していない生徒への手立て	・ 筆者の気持ちを表す語句に着目させ、その変化を基に段落と段落の関係や話の展開を捉えさせる。

(2) 目標行動（G）

文章の構成の工夫について分かったことを、例えば次のように発表することができる。

伝えたいことを的確に伝えるためには、「起」「承」「転」「結」というまとまりを意識し、それぞれの役割を考えながら、何をどの段落に書くか決めるとよい。また、登場する人や出来事、時間、場所などの関係や変化などを明確にし、どのような順序や流れで書くか読み手を引きつけたり、納得させたりすることができるか考えて書くことよい。

(3) 下位目標行動

- ① 並び替えた文章（Ⅰの文章）と並び替える前の文章（Ⅱの文章）を比較し、構成の工夫について、例えば以下のように発表することができる。

- ・ Ⅰの文章は、「起」と「結」が呼応するように書かれているため、初めに感じたことがどのように変わったり深まったりしたかがよく分かる。Ⅱの文章は、まとめて自分の決意がよく分かるが、そのような気持ちになった過程が順序よく書かれていないため、説得力に欠ける。
- ・ Ⅰの文章は、「いやだった」→「胸がしめつけられる」→「苦しくなった」→「勇気づけられて」→「ほこらしく」→「絶対に忘れてはいけない」→「わたしの心を熱く」→「母と同じ気持ち」→「うれしくなった」というように、筆者の考えや思いが、深まっていく過程がよく分かる。Ⅱの文章では、なぜ母親と同じ気持ちになり、うれしくなったのかに対する理由が分かりづらくなっている。
- ・ Ⅰの文章では「転」で「日本」という大きな視野から見た「戦争」について書かれているので、筆者の考えが広がり、深まったことがよく伝わってくる。Ⅱの文章では、「転」であるべき部分が「承」になっているため、盛り上がりには欠け、最後の段落まで筆者の考えの広がりや深まりが伝わってこない。
- ・ Ⅰの文章では「結」で、「手渡してあげよう」「わたしの気持ちをたくして」というように、自分の将来に向けた決意が具体的に書かれているため、筆者の思いが力強く伝わってくる。Ⅱの文章では、「わたしたちの世代は」とあるように大きな立場から書かれているため、力強い文ではあるが、筆者の思いとしては弱い印象を与える。

- ② 「起」「承」「転」「結」というそれぞれの段落の役割を考えた上で、より適した文章の構成を決めることができる。
- ③ 文章の題名が「母からのおくり物」であることを知ることによって、筆者は、平和の意味について母親から教えられたことを「母からのおくり物」と捉えており、それを次の世代に伝えていきたいという思いを読み手に伝えたかったのだということを発表することができる。
- ④ 互いの考えを参考にしながら、どのように並び替えると筆者の伝えたいことがよりの確に伝わってくるか話し合うことができる。
- ⑤ グループで決めた順序とそのように決めた理由を発表することができる。
- ⑥ 筆者の伝えたいことがよりの確に伝わってくる文章にするためには、どのような順序にすればよいか、グループで話し合うことができる。
- ⑦ 筆者の伝えたいことがよりの確に伝わってくる文章にするためには、どのような順序にすればよいか、自分なりの考えをもつことができる。
- ⑧ R 本時の学習課題を「筆者の思いや考えがよりの確に伝わる文章にするためには、どのような順序にすればよいだろうか。」であることを理解することができる。
- ⑨ R 本時は、文章の構成の工夫の仕方について学ぶ時間であることを理解することができる。
- ⑩ R モデル文を音読し、特徴やよさを発表することができる。

(4) 本時の実際

時間	学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点	評価活動
5'	スタート	<導 入> ・ 四つの意味段落を意図的に並べ替えたモデル文の特徴やよさを発表させ、学習への意欲づけを行うとともに、文章の構成に対する疑問を喚起させる。	
3'	モデル文を音読し、特徴やよさを発表する。 (10R)	・ 本時は、モデル文を基に、筆者の伝えたいことがよりの確に伝わるような文章の構成を「個→グループ→全体」で考える学習であることを確認させる。 ・ 「自分だったらどのような順序で文章を構成するか」と問いかけることによって、学習に対する意欲を高めさせる。	
3'	本時の学習課題と学習の流れを確認する。 (9R, 8R)	<学習課題> 筆者の思いや考えがよりの確に伝わってくる文章にするためには、どのような順序にすればよいだろうか。	
15'	個人やグループで、より適切な段落の順序について考え、話し合う。 (7, 6)	<展 開> ・ 自分の考えを明確にもたせるために、自分なりに段落の順序を決めさせた上で、グループで話し合わせる。 ・ 段落をどのように並び替えると筆者の伝えたいことがよりの確に伝わってくるか、という視点で話し合わせる。 ・ 自分たちの主張に説得力をもたせるために、根拠となる語句や表現を明確にさせる。	○ 友達との話し合いを通して、自分の考えを広げ、深めることができたか。 (発表・観察)
10'	全体で、より適切な段落の順序を決める。 (5, 4, 3, 2)	<達成していない生徒への手立て> ・ 筆者の気持ちを表す語句に着目させ、気持ちの変化を基に段落と段落の関係や話の展開を捉えさせる。 <達成している生徒への手立て> ・ それぞれの段落の役割と効果について考えさせ、文章の構成を工夫するよさを捉えさせる。	○ 筆者の伝えたいことがよりの確に伝わる文章構成を指摘することができたか。 (発表・観察)
15'	並び替える前と後のモデル文を比較し、文書の構成の工夫の仕方について話し合う。 (1)	・ モデル文の題名を知らせ、筆者の伝えたいことを明確にさせた上で、より適切な段落の順序を決めさせる。 ・ 並び替える前と後のモデル文を、筆者の気持ちや書かれてある内容の変化に着目しながら比較させ、筆者の気持ちがよりの確に伝わる文章の構成について理解させる。	○ 段落の役割や的確な文章の構成の仕方を理解することができたか。 (発表・観察)
2'	学習のまとめをし、次時の学習について確認する。 (G)	<終 末> ・ 段落にはそれぞれ役割があること、その役割に適した内容を選ぶと、伝えたいことがよりの確に伝わる文章になることを確認させる。 ・ 登場する人や出来事、時間、場所などの関係や変化を明確にし、書く順番を工夫することによって、読み手を引きつけたり、納得させたりすることができることに気付かせる。 ・ 次時は、より効果的な語句の使い方や表現の仕方について学習することを知らせる。	
	ゴール		